

障害者フライングディスク競技の普及について
—特に富山県の普及について—

金田安正¹⁾

Propagation of Flying Disk for the Disabled
with Reference to Toyama Prefecture

Yasumasa KANEDA

Abstract

In 1998 the Japan Flying Disk Federation for the Disabled was formally established and since then, the chief director, secretary general, and directors have been holding training classes for instructors for further extension in various local districts in Japan.

In Toyama, they have been holding training classes almost annually and the registered numbers of instructors was the highest nationally in 2009.

Our study shows how flying disk for the disabled has been propagated in Toyama and how such progress can enable the drafting of information for further development of sports for the disabled in local districts.

Key Words : 障害者フライングディスク, 富山県での普及

1) 生涯スポーツ学科

はじめに

1998年に日本障害者フライングディスク(以下「FD」と称す。)連盟が正式に発足し、その年から連盟理事長、事務局長、理事などが全国各地で指導者養成講習会を開き、指導者を養成し普及を図ってきた。

富山県では、2001年に富山県障害者FD協会が発足し、毎年障害者FD指導者講習会を開催してきていることもあり、2009年度では登録指導者数が全国でもっとも多くなった。

今後、地方における障害者スポーツの普及を図るための資料とするべく、普及が進んでいる富山県で、障害者FD競技がどのように普及してきたかを考察する。

I. 障害者 FD 競技

1. 概歴

1968年、シカゴで第1回スペシャルオリンピック国際大会が開かれ、FD競技が知的障害者スポーツにもっともふさわしいということで、正式競技として採用された。

日本では、1981年に神奈川県藤沢市で第1回スペシャルオリンピック全国大会が開かれたが、その際、正式競技として採用され行われたのがはじまりである。1992年から、スペシャルオリンピックに代わってゆうあいピックが開かれるようになり、第1回東京大会からFD競技が取り入れられ実施されている。

1992年、日本FD協会の障害者支援委員会が発展したため改称し、「日本障害者FD連盟」として独立し、ゆうあいピックの運営を担当しはじめた。さらに同連盟は1997年、東京で第1回全日本障害者FD競技大会を開催した。1998年には、障害者区分等の問題が解決したことから、日本障害者FD連盟が正式に発足した。なおこの年から競技の普及を図るために、全国各地で指導者養成講習会を開催しはじめた。

2001年、従来行われていた身体障害者の全国大会と知的障害者の全国大会(ゆうあいピ

ック)が合併することになり、宮城県で第1回全国障害者スポーツ大会が開催された。この大会から障害者FD競技も正式種目として実施されることになった。

ほとんどの障害者スポーツ競技では、男女別に、同種類、同程度の障害者が競い合うのだが、障害者FD競技の、とくにアキュラシー(正確投げ)競技はどのような障害があろうとも、また性別で分けることなく混合して実施する競技としてスタートした。従来の知的障害者だけの競技ではなく、身体障害者も含めた合同で行う、このような障害を超えて競技を行っている種目は他に類がない。

2. 競技種目

1) アキュラシー

スローイングの正確性を競う競技で、競技者は5mあるいは7m離れたゴールのどちらかを選択し、ディスクを連続して10枚投げ、何枚ゴールを通過したかを競う。男女、障害別の分けをしないうで競技をするところに特徴がある。

2) ディスタンス

ディスクを投げた距離を競う競技で、連続して3枚投げ、最長距離を競う。筋力と投げ出し位置が大きく影響するため、この競技では男子座位/立位と女子座位/立位の4区分に分けて競技を行う。

II. 全国の地方障害者 FD 協会との比較からみた富山県障害者 FD 協会の活動状況

日本障害者FD連盟が2010年3月時点で把握している各都道府県障害者FD協会の活動状況から富山県の実態をみる。なお、資料には沖縄とは別に八重山も地区協会として別に記載してあるが、八重山を除いた47都道府県協会の結果で示す。また、富山県の欄に間違いがあるので、訂正したうえで検討する。

表1 指導者養成講習実施状況(抜粋)

都道府県	合 計				会 員 数	
	回数	受講者	登録者	登録率	現登録者	継続率
秋田	6(回)	158(人)	125(人)	79.1(%)	81(人)	64.8(%)
埼玉	7	320	229	71.6	48	21.0
東京	9	293	131	44.7	55	42.0
神奈川	8	239	147	61.5	84	57.1
新潟	9	235	174	74.0	78	44.8
富山	12	460	222	48.3	111	50.0
岐阜	7	218	154	70.6	84	54.5
静岡	6	355	249	70.1	75	30.1
愛知	5	348	205	58.9	75	36.6
滋賀	1	32	31	96.9	26	83.9
京都	3	35	24	68.6	19	79.2
大阪	6	353	173	49.0	56	32.4
和歌山	3	84	56	66.7	47	83.9
岡山	9	405	192	47.4	73	38.0
広島	10	271	148	54.6	69	46.6
	234	8081	4925	61.3	2131	43.4

1. 指導者講習会開催回数, 受講者数

表1では、講習会の開催回数を示している。1998年から2009年までの間、全国で234回開かれているが、富山が12回ともっとも多く開催している。次いで広島の10回、東京、新潟、岡山などの9回、神奈川の8回である。なお、全国平均は5.0回で、滋賀が1回だけで、2回というのが群馬など6地区ある。

受講者総数は講習会の開催回数とも関係するのだが、富山がもっとも多く460名で、次いで岡山(9回開催)が405名、静岡(6回)355名、大阪(6回)353名と続く。

2001年以降に全国障害者スポーツ大会が開催された県(静岡;2003年,岡山;2005年,新潟;2009年)が多いことが特徴としてみて取れる。

2. 公認指導者登録者数

日本FD連盟公認指導者となるためには、講習会を受講して、その後レポート審査を受けた後登録するわけだが、過去8081名が受講し今まで4925名が登録している(61.3%)。静岡の249名がもっとも多く、次いで埼玉の229名、富山の222名、愛知の205名と続く。な

お、全国平均は104.8名で、50名以下の登録者数なのは鳥取、京都など7地区ある。

受講者数をもっとも多い富山だが、登録率は48.3%と低い。その他の受講者が多い岡山(47.4%)、大阪(49.0%)なども登録率は低い。ただ静岡だけは受講者が多く登録率も70.1%と高い。

3. 指導者としての会員継続率

登録した後も、毎年更新していかなければならないのだが、更新者数は現在2131名で継続率は43.4%である。現登録者数でもっとも多いのが、富山県の111名で、次いで神奈川84名、岐阜84名、秋田81名である。全国平均では45.3名だが、21~30名という地方協会がもっとも多く11地区ある。

継続率が高いのは、滋賀83.9%(26名)、和歌山83.9%(47名)、京都79.2%(19名)などだが、少ない人数の人たちが継続して行っていることがわかる。

現登録者数が多い地区では、秋田が64.8%ともっとも継続率が高く、次いで神奈川57.1%、岐阜54.5%、富山50.0%である。高い数字ではないが、全国の平均継続率よりは高い。

4. 大会の開催

県レベルの大会の規模をみると、表2に示すとおり、参加者が700名以上の大会を行っているのは、茨城県特別支援学校体育連盟体育大会（800名）と福島県障がい者総合体育（FD）大会（735名）の2大会である。その他601～700名の規模が2カ所、501～600名が3カ所ある。200名以下の規模の大会が54.5%と半数を超える。

富山県障害者スポーツ（FD）大会の参加者数は表3に示すとおりで、2002年度から急に400名を超えるようになり、その後はほぼ横ばいで推移している。陸上競技の参加者が減ってきており、2008年度では、FDの参加者の方が陸上競技のそれより多かった。

富山県障害者FD協会が主催するフェスティバルの参加者数を表4に示したが、300余名で推移している。なお、この大会は2月下旬から3月下旬にかけて行われているが、季節、また時節がら、雪の影響や、人事異動で

職員や教員が引率できないという影響があるため、参加者数にはバラつきがある。

Ⅲ. 協会設立の経緯

1. 設立時までの活動

2000年秋、富山県で国民体育大会後、全国身体障害者スポーツ大会が開催された。その際、障害者FDが翌年から正式種目になることもあり、ふれあい広場でデモンストラーション大会を開催している。この大会では、障害者支援施設（社福）セーナー苑の職員が中心になって大会運営を行っている。

2. 協会の設立

日本障害者FD連盟からの要請もあり、2001年3月に富山県障害者FD協会が設立された。設立にあたり、設立趣意書を作成し、関係機関・諸氏に、設立の協力を呼びかけているのだが、発足時に留意している主な点は次のとおりである。

表2 大会参加者数（2008年度）

(参加者数)	(大会数)
1～100名	25 (28.4%)
101～200名	23 (26.1%)
201～300名	15 (17.0%)
301～400名	11 (12.5%)
401～500名	7 (8.0%)
501～600名	3 (3.4%)
601～700名	2 (2.3%)
701～800名	2 (2.3%)

- *1：仙台市障害者スポーツ（FD）大会（607名）
あいち障害者FD競技大会（646名）
- *2：福島県障がい者総合体育（FD）大会（735名）
茨城県特別支援学校体育連盟体育大会（800名）
- * 富山県障害者スポーツ（FD）大会（440名）
- * フェスティバル（みんなでFD）（318名）

*1
*2

表3 富山県障害者スポーツ大会参加者数

	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009
陸上競技	694	620	573	538	492	460	416	418	中止
水泳	50	45	57	49	57	51	42	54	38
FD	218	420	434	466	467	430	367	440	323
卓球	65	45	101	114	131	148	112	108	105

表4 フェスティバル参加者数

	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009
参加者数	330	319	350	304	376	360	318	263
個人戦	279	291	321	270	337	329	293	236
ペア戦	156	120	131	130	152	162	164	118
チーム戦	200	170	151	145	155	160	120	110

FD競技は従来、知的障害者を対象としたゆうあいピックの競技種目であったところから、知的障害者の施設や関係者にのみ知られ、また実施されていた。特にセーナー苑職員の間が強く見られていた。そのため、知的障害者の関係者に偏らないように、できるだけ多くの障害者に参加してもらえるように配慮している。また、当時行政的に所管の異なる精神障害者をも含めることにしている。さらに、障害者だけを対象とするのではなく、できるだけ健常者をも含めて普及を図るようにしている。

富山県にある障害者団体にできるだけ多く参加してもらうため、各種障害関係団体・施設、養護学校などから、また富山県は地区を大別して4つに分けることができるが、できるだけ均等になるように役員を割り振っている。

会長には、県の障害者団体の統括的な立場にある県障害者社会参加推進協議会会長で県身体障害者福祉協会の会長にお願いし、副会長には知的障害関係団体、精神障害関係団体の代表者とするなど、障害が偏らないようにとの配慮がなされている。

理事長には、障害者FD競技規則の作成に深く関わった日本障害者FD連盟理事で、元日本障害者スポーツ協会技術委員で、障害者スポーツの普及、指導に詳しい者が就任している。

事務局長には、従来から中心的に活動してきたセーナー苑の職員がなり、事務局長は、総務など5部門に富山県各地からの関係者と当苑からのそれぞれ1名ずつ配置している。

Ⅳ. 富山県障害者FD協会の活動

県障害者FD協会の活動には、県障害者スポーツ協会が主催する事業の補助的な活動と、FD協会独自の事業との2種類がある。ここでは、それらを分けて活動内容を紹介する。

1. 県障害者スポーツ協会事業の一環

1) 県大会の運営

富山県が主催する富山県障害者スポーツ大会には陸上、水泳、卓球とFDの4種目あるが、そのうちFD競技の大会運営を任されている。年に1回、9月に開催されているが、競技運営、審判を担当している。

2) スポーツ教室の開催

県障害者スポーツ協会は16種目について、障害者スポーツ教室を実施している。そのうちFD競技についての教室開催を委託され、富山県の4地区でそれぞれ3回ずつ計12回開催している。それぞれの地区では、それぞれの地区の事務局員が中心になって指導にあたっている。全国大会選手の練習会を兼ねることもあり、その際は地区を越えて選手、コーチが参加して指導している。

3) 指導者養成講習会の開催

県障害者FD協会は毎年、指導者養成講習会を予算化しているものの、県障害者スポーツ協会が1998年から毎年、日本障害者FD連盟から講師を迎え、指導者養成講習会を開催している。その際、県障害者FD協会からも講師、および補助員として参加協力している。

4) 助成金による事業

県障害者スポーツ協会の「障害者スポーツ活動活性化事業助成金」の助成を受け、2006年から4年間連続で、「出前教室」を開催している。

これは、主に施設や作業所などを対象として講習会開催の希望を募り、開催を希望する施設等に事務局員等が出向いて指導するもので、毎年4～8カ所まで指導を行っている。なお、その際、助成金で購入したディスクを使用し、そのディスクをそのまま継続して使用してもらうべく寄付している。

さらに、2009年以降2年連続で、県障害者FD協会が主催する「フェスティバル（障害のある人もない人も）みんなでFD」の開催経費について補助がなされている。

5) 中央講習会への派遣

日本障害者FD連盟は、毎年全国大会を開催しており、その際全国から指導者を集め、大規模大会の運営および審判技術の向上を図るため「全日本障害者FD競技大会兼審判員養成講習会」を開催している。県障害者FD協会からは毎年2、3名派遣しているが、1名分(2001、2002年度は2名分)について、県障害者スポーツ協会の補助を得ている。

2. 富山県障害者FD協会独自の活動

1) フェスティバル(障害のある人もない人も)みんなでFDの開催

障害者FDの普及をめざして、県障害者FD協会が独自に開催、運営しているアキュラシー競技だけの大会である。その内容としては大別して2種類あり、1つは午前中に行われる個人戦で、他の1つは午後から行われる団体戦である。

午前の個人戦は、障害者だけが行う従来の競技である。午後からの団体戦には、ペア戦とチーム戦の2種類がある。ペア戦は2名の合計点数を競うわけだが、1名は必ず障害者でなければならない。あとの1名は友人、家族など障害の有無に関係なく参加できる。チーム戦は5名のチームが競うが、そのうち3名が障害者である必要がある。他の2名は指導員やボランティアなどでも参加できる。なお、チーム戦は全国ではじめて実施された競技種目である。

ペア戦では6組中3組を表彰し、チーム戦では全体の中から6団体を表彰している。

なお、この大会は冬の時期に行われるため、富山では屋内でしか開催できないので、アキュラシー競技のみを実施している。

2) 出前教室の実施

県障害者スポーツ協会が実施している「障害者スポーツ活動活性化事業助成金」事業に企画を申請し助成を受けるものだが、2006年以降4年連続で助成を受け活動している。

普段FDに接する機会がないと考えられる、

障害者施設や作業所、グループホームなどに対し講習会開催の希望を募り、協会役員が希望する施設等に指導に出かけているのだが、4年間で22カ所に出かけ、638人に指導を行っている。

3) 齊藤杯争奪戦の開催

県障害者FD協会発足以前、知的障害者施設、現在の障害者支援施設(社福)セーナー苑の理事長であった齊藤乃夫は、障害者FD競技の普及に大きな関心を示めし、いろいろと普及活動を支援した。

2001年、齊藤の遺族から「県の障害者FDの発展のために」と寄付があったため、障害者のみならず指導者自身の技術の向上も大切なことであるという考え方で、関係者全員が競う機会を設け、そのための優勝杯を製作することにした。

上述したスポーツ教室は、富山市で例年5～6月に開催されている。その最終日に協会の総会を開いているが、そのためこの日の参加者は多い。教室終了後に教室受講者や協会の会員である総会出席者が参加して、競技会を開き、優勝者に齊藤杯が授与されている。

種目的には、アキュラシーのみで、7mと5mを連続して10投ずつ計20投での点数を競っている。

4) 指導者養成講習会

県障害者FD協会は、講習会開催を協会予算として組んでいるものの、県障害者スポーツ協会が毎年講習会を開催しているため、独自の講習会を開催していない。

ただし、養成講習会ではないが、総会時には、理事長、あるいは事務局長、中央講習会参加の事務局員が、日本連盟や他県の動き、普及時の問題点等を伝達したり、検討しあったりしている。

5) 障害団体、施設、学校からの教室、審判員の派遣要請に対する対応

協会設立時にとくに多かったが、視覚障害やその他の障害者団体の集まりの際に、講習会開催の要望があり、協会役員を順次派遣し

ている。

出前教室制度があったことや指導員が多くなったこともあり、最近では講習会の開催要望は少なくなってきた。しかし、県や市の身体障害者福祉協会をはじめ、障害者団体が主催する障害者FD大会への審判の要請が多い。

6) 山本杯の創設

県FD協会設立時から9年間にわたり会長を勤めてきた山本八左衛門の退任に伴い、同氏から寄付があったため、奨励のための記念トロフィーを100個製作している。

このトロフィーは、県FD協会主催で2010年度開催のフェスティバルから、アキュラシー競技で10点満点を記録した選手すべてに与えられることになっている。

V. 考察

県FD協会の活動と全国の地方協会の活動を見てきたが、その中から富山県の障害者FDが特に盛んになった理由を考察する。

1. 県障害者スポーツ協会の支援

1) 指導者講習会の開催

日本障害者FD連盟が1998年から指導者養成講習会をはじめたが、初年度開催は宮城、東京、富山、大阪の4都府県である。なぜ富山のような地方都市でこのような時期から知名度の低い競技種目である障害者FDについて指導者講習会が開かれたのか、その要因を当時の県障害者スポーツ協会事務局職員や関わりのあった知的障害者施設などの関係者から話を聞いたが、次のようにまとめることができる。

県障害者スポーツ協会では日本障害者スポーツ協会公認の指導者養成講習会の他に、車いすバスケットボールなど種目別の指導者養成講習会を開催していた。この種目別指導者養成講習会は、毎年予算化して実施している。

2000年には、富山で全国身体障害者スポー

ツ大会が開催されることになっており、1998年当時の富山県では、障害者スポーツに対する県民の理解と関心を高めること、また障害者自身が参加、活動できる体制づくりの機運が高まっていた。

2001年から身体障害者と知的障害者が一緒に競技を行うというまったく新しい発想の種目の出現に、富山県障害者スポーツ協会は全国大会開催を控え、上に記したような機運が高まっている時期に、新たな展開をめざして障害者FDの指導者養成講習会を開催した。

開催にあたっては日本障害者FD連盟の働きかけもあり、新潟県や石川県の関係者も参加した。そのこともあり、初年度は60名と、従来の講習会参加者より圧倒的に受講者の数が増えた。ちなみに翌年からは富山県からだけだが受講者は90名、翌々年では79名が受講しているなど、従来の種目別講習会の受講者数を大きく上回っている。このようなことから、FD競技についての指導者養成講習会が毎年開催されている。

富山県においても、受講後一度は登録しても年が経つにつれ更新しなくなる者も少なくないのだが、新しく受講した人たちが新規に登録することで、登録者が減らずに微増している。特に、他県に比べて講習会の開催数が多いため、新規登録者が必ずおり、登録者数が増えている。

2) その他

県障害者スポーツ協会から委託を受け、県障害者FD協会は県内4地区に区分けし、それぞれ3回ずつ計12回教室を開催している。重複受講者が少なからずいるが、すこしずつではあるが、新しくはじめる人が増えている。

県障害者スポーツ協会が行っている「障害者スポーツ活動活性化事業助成金」事業により、出前教室の開催と大会開催の補助を受けている。出前教室を行なうことで、講習会に参加できない障害者に直接指導することができ、さらにディスクを配布することで、受講

者が継続して実施することができている。また、フェスティバルを3月に開催しているが、体育館利用の際、暖房費が高いため寒い中で競技を行っていたが、助成金の補助により暖房の利いた中で大会を開催することができている。

県障害者スポーツ協会の予算で、全日本障害者FD競技大会兼審判員養成講習会に毎年1～2名が参加できている。毎年交代で新しい人を送り込んでいるが、大規模な大会運営を体験することができ運営することによりかなりの自信を得、また指導・審判レベルが高まっており、以後の活躍につながっている。

2. フェスティバルの開催

障害者だけでなく、家族やボランティア、施設等の職員などの健常者も参加できる大会である。障害者がより積極的にスポーツ活動に取り組むようになるには、本人の意志が必要なことは当然であるが、これらの周りの人たちの協力も大切なことである。周りの人たちにただ協力してくれといっても、常時積極的に協力してくれるとは限らない。そこで、周りの人たちが競技に参加できるようにすることで積極的に練習したり協力するようになることを当て込んだものである。なお、日本障害者FD連盟主催の大会などいくつかの大会には健常者とのペア戦が行われているが、チーム戦は全国唯一の競技である。

県が主催している大会には、精神障害者はオープン参加ということで正式競技参加者ではないため、他の障害者と競うことはなく精神障害者同士だけで競い合っている。しかし、県障害者FD協会主催の大会では、精神障害者を含めたすべての障害者が混合で競技を実施している。

富山の県障害者FD協会主催の大会に、このように健常者や精神障害者などを積極的に取り込んでいることが、活動が普及し、競技者も多くなっているものと考えられる。

3. 齊藤乃夫氏と知的障害者施設（現障害者支援施設）（社福）「セーナー苑」の貢献

日本障害者FD連盟理事長とセーナー苑理事長だった齊藤は、以前同時期に旧厚生省社会局に勤務しており、お互いに障害者スポーツの発展に関心を持っていた。

当時セーナー苑から知的障害者スポーツ大会であるゆうあいピックに多くの選手や指導者を派遣していたこともあり、齊藤は、もともと障害者FD競技に関心を持っていた。そこへ新しく設立された日本障害者FD連盟の理事長から趣旨説明を受けた齊藤は、趣旨に賛同し、富山での普及に積極的に尽力しはじめた。

加えて前項で述べたが、1997、8年頃、県障害者スポーツ協会が新たに障害者スポーツの普及を図ろうとしている時期と重なり、他県に先立って講習会を開催することとなった。

2000年、富山県で開催された全国身体障害者スポーツ大会の際、ふれあい広場が設けられ、障害のある人もない人も気軽に楽しめる各種スポーツ種目の体験コーナーが設置された。そのうちの一種目として、次年度から正式種目として実施される「全国障害者スポーツ大会」のデモンストレーション種目としてFDが紹介された。その際、齊藤は自ら陣頭指揮を執り、セーナー苑の職員を多く役員として協力、参加させた。

齊藤の理解があったため、セーナー苑の職員が積極的に参加協力するとともに、職員も大会への参加がしやすくなっていた。事務局長をはじめ多くの職員が積極的な協力姿勢を持っていることで、現在も引き続いて、大会前のプログラム編成、印刷、製本などを引き受けている。また、大会開催のための用具を保管していることもあり、大会会場の設営なども積極的に行なっている。

4. その他

1) 県内4地区にキーパーソンが存在

協会設立当時、理事の選考や事務局員の配

置を行う際、一部の障害種類や地区、施設、人に偏らず、全県にまたがった人事を行なっている。富山県は地区を大きく4分割することができるが、4地区すべてに県障害者FD協会の事務局員を配置している。また日本障害者FD連盟主催の大会開催時に同時に開かれている指導者講習会には4地区と障害種類を配慮して交代で派遣しているが、そのことで幅広い領域での指導・管理能力の質が高い者が増えている。これらの人たちがそれぞれの地区や障害者団体で活動してくれていることから、一部の地区や一部の障害にのみ普及するのではなく、全県的にFDが盛んになったと考えることができる。

2) 各種障害者団体、施設への趣旨徹底

協会設立当初、できるだけ多くの関係施設へ趣意書や大会の案内を配布したことで、多くの関係者にその存在が知られ、また団体正会員(年間1万円)と賛助会員(年間5千円)を募り協力を得ている。

2008年からのフェスティバルに参加費を徴収しているが、正会員か賛助会員か、あるいは会員でない場合、参加者の参加費が異なるので、会費納入に理解が得られるようになっている。

3) 県・市身体障害者福祉協会の参加

FD競技は、もともと知的障害者のゆうあいピックで実施されていた競技であるため、大会参加者は知的障害者が多い。しかし、県身体障害者福祉協会が積極的にFDを取り入れ、独自の大会を開催していることもあり、各市の身体障害者福祉協会も別に独自の大会を開くなど積極的に取り組むようになり、競技人口が増えた。

身体障害者福祉協会代表者が次のように語っている。

「以前ゲートボールを行っていたが、ゲームがヒートアップしすぎ、チームの仲間同士で罵りあったり叱り飛ばすことが多くなり、ゲートボールを辞めただけでなく、集いにも参加しなくなった人が出てきてしまった。

その点、FDはこのようないざこざがないばかりでなく、高齢者にとって適度な運動量なのがよい」

身体障害者福祉協会には高齢者が多いのだが、老人クラブ的な「人とのつながり」要素が強く、ゲートボールに変わる種目として捉えられているようである。

富山県の大会には、つい最近まで99歳の人も参加していた。この人は週2回の練習にも欠かさず出席していたという。100歳になった頃、家族が安全をとって練習や大会出場を控えさせたとのことである。

4) 精神障害者を含めて発展

精神障害者と身体や知的障害者とは県庁の担当課が異なるため、県障害者スポーツ協会は精神障害者に大会や講習会開催などの案内を出していない。しかし、県障害者FD協会はすべての障害者に対し案内状を出し、また精神病院や作業所などに積極的に出前教室も行なっている。

県主催の大会にも県障害者FD協会が案内状を出したため、当初、県庁内で混乱が見られたようである。しかし現在では、県主催の大会に出場を希望する精神障害者が出てきたため、県の大会ではオープン競技の参加という形で実施している。

県障害者FD協会主催のフェスティバルでは、最初からすべての障害を混合して競技を行っている。

5) 富山県の立地条件

県主催の大会や県障害者FD協会主催の大会は富山市で開催されている。富山県は東西90km、南北76kmの蝶が羽根を広げたような長方形型の地形で、東部から東南部、南部にかけ山々に囲まれている。富山市は富山平野のほぼ中央部に位置しているため、富山市からもっとも離れている市町村でも40kmも離れていない。大会会場が、他県に比べ距離的には遠く離れているわけではないので、多くの地域の人たちが参加しやすいことも、盛んになった理由として考えられる。

まとめ

2001年に富山県障害者FD協会が設立され、いろいろな活動をしているが、現在日本障害者FD連盟登録指導者が全国でもっとも多い。活動の現状を示しながら、富山がなぜ盛んなのかを考察した。

富山県障害者スポーツ協会が1998年から毎年、計12回も障害者FD指導者講習会を開催しているが、これほど多くの講習会を開催している県はない。県障害者スポーツ協会はさらに「障害者スポーツ教室の開催」や「出前教室の支援」、「フェスティバル開催の補助」、「全国障害者FD競技大会兼審判員養成講習会への派遣」などの事業についても積極的に支援している。このように県障害者スポーツ協会の支援の大きいことが、富山県の障害者FDが大きく発展した理由としてまず最初に挙げることができる。

県障害者FD協会の設立趣旨でもあるが、知的障害者や身体障害者だけに止まらず、精神障害者にも普及を図っている。さらに健常者も含めた独自のフェスティバルを開催しているが、このように幅広い層の人たちを巻き込んで普及に努めていることが、競技者の増加につながっている。

知的障害者（現障害者支援）施設セーナー苑の元理事長齊藤乃夫は障害者FDに強い関心を示し、自ら陣頭指揮を執り、利用者に普及する一方、セーナー苑の職員を積極的に普及活動に参加させた。齊藤の亡くなった現在でも、職員間に障害者FDへの理解がある。セーナー苑の職員たちは現在も引き続いて、事務局業務や大会にあたっての準備業務を積極的に行なっているので、事業がスムーズに進行している。

県・市町村の各身体障害者福祉協会は、週2回程度定期的に練習会をしたり、市町村別

に大会を開催したり、県の大会に貸切バスで参加している。高齢者が多く老人クラブ的な活動ぶりだが、これらの人たちの参加がFD競技人口の多い理由でもある。

富山県は地区を4分割することができるが、4地区すべてに県障害者FD協会の事務局員を配置し、中央の講習会に参加させたりして、指導、管理能力の高い者が、それぞれの地区で普及に努めている。そのため、一部の地区や一部の障害のみに普及するのではなく、全県的に、また多くの障害者に楽しまれている理由と考えられる。

謝辞

今回の調査にあたりご協力をいただきました、日本障害者FD連盟事務局長吉田力男氏をはじめ、富山県障害福祉課大塚則之氏、富山県障害者スポーツ協会、富山県障害者FD協会事務局長野上和也氏、元富山県障害者スポーツ協会事務局次長山崎修氏に厚くお礼を申し上げます。

文献

- 1) 若山浩彦(2004) フライングディスク, 障害者のスポーツ指導の手引(第2次改訂版), (財)日本障害者スポーツ協会編, ぎょうせい, 270-276
- 2) 第36回全国身体障害者スポーツ大会「きらりんぴっく富山」大会報告書(2001), (富山)2000年国体富山県実行委員会発行, 北日本新聞社制作, 29-30

資料

- 1) 第10回地域協会事務局長会議(2010), 日本障害者FD連盟編
- 2) 富山県障害者スポーツ協会総会資料(1998年度~2009年度)
- 3) 富山県障害者FD協会総会資料(2002年度~2009年度)